

大水害と移住の概要

大水害と移住の概要

明治四十年（一九〇七）夏
旧盆を楽しんでいた山梨の人
たちは、三日三晩の大雨によ
る大洪水を見舞つれ。

る大沢水は見舞われた
『明治四十年八月二十三日
より二十五日にわたり豪雨あ
り、大原村（現猿橋町）に於
ける降雨量七一八ミリを示し、
遂に笛子川其の他の大氾濫と
なり、附近郡山の大崩壊とな
り、家屋田畠を流亡し、人畜
の死傷また多数を出せり』
北都留郡誌は「前古未曾
有」の大水害の有様を伝えて
いる。

最終的に、当時の北都留郡十八ヶ町村（今は二市二村に合併）の被害は、死者八十七人、負傷者三十六人、家屋全壊二百四十六戸、半壊六十四戸、破損四百六十八戸、流失八百二十五戸、浸水三百四十戸といふ膨大なものとなつた。

堤防決壊三十七ヶ所千五百八十五間（二、八五三m）、破損四ヶ所一〇六間（一九〇、八m）、道路流失埋没三百七十九ヶ所一万二千七十五間（二一、七三五m）、破損三百四十二ヶ所六千百二十六間（一一、〇二六、八m）橋梁流失破損二百十七ヶ所。田埋没流失七十六町五反歩。浸水二十九町八反歩。畑埋没流失三百二十九町二反歩。浸水二十九町八反歩。山林埋没流失四百五町三反歩。山崩九百十四ヶ所。

× × × ×

当時十四歳で雑貨店を手伝っていた塩沢芳蔵さん（大月一丁目）は、「夜中の三時頃『水が出た』と起こされ、朝の六時半か七時半には殆どの家が流された。五年前に開通した中央線の土手に家財を運んだが、向かいの山から流れる水が土手でせき止められ

湖のよう。そのうち土手がえぐられて、私の足元も流され枕木ごと転落した。どうして助かったのか無我夢中でした後で知つたのですが避難所の祖祠堂が流され大勢死んだとのことです。」
「 笹子駅近くに住む天野さんは、家こそ流されなかつたが忘れようにも忘れない、二かかえもあるケヤキの大木がどんどん流れた恐怖を話す。「沢が押して来て 笹子川とぶつかつて、前の日と翌日ではまるつきり地形が変わつた。 笹子だけでなく甲州街道沿いの集落に古そうな家が見えなくなり村が消えた。」

が先に渡り、次に知事、長男
最後は次男が渡った。」また
この時、知事が目撃した光景
は、対岸の榎の枝に九十人が
登り流失をふせいたり、濁流
で流れる藁家の屋根に「お助
けなってよう、お助けなって
よう」と金切り声をあげてい
る裸の女も見られた。



り着いた。武田知事は『これ以上は無理だ。甲府へ引き返します。』この四人は道を捜しながら行つたり来たりして、石和町の手前にある鵜飼橋の左岸にでた。二昼夜にわたつて彷徨した末の八月二十五日の朝であった。濁流が堤防の岸いっぱいに大きな波をたて、ものすごい音を出して流れている。(中略)やっと対岸の者に連絡がとれ、駆けつけた警察署長等が川端の榎の枝から橋の欄干に針金を張り、橋杭を攀じ登れるよう足場を作り、針金を伝わつて泳ぎ秋山

一戸、千四百二十七人が渡洋した。当時、弁邊（べんべ）と呼ばれていた現在の豊浦町山梨地区には北都留郡の六十九戸をはじめとして、南都留、東山梨、北巨摩四郷からの一九三戸が入植。残りは今後の後志管内俱知安町に至り、のちに同管内の京極町へ赤井川村にも移った。

翌四十二年三月、北都留郡の六十八戸を中心に、山梨県下八郡から、百六戸五百十一人が、今豊浦町新山梨地に入植。この第二陣は大月、入列車で青森へ。貸し切りの

汽船玄海丸に乗つて直接、弁邊港に上陸し前年に入つた山梨部落の人たちが作った共同小屋に落ち着いた。

移住者の七割は農家だったが、商人や手工芸業者なども交つており、国・県の補助、県民からの義援金をもとに農具、食糧などが支給されたもの、大木を倒すことから始まつた開拓の苦労はひとしお。同四十三年七月の有珠岳大爆発にはキモを冷やしたと言ふ入植に際し、山梨県が指定した必需品の中に赤毛布（赤げっと）があり、それを足に

新山梨部落にある開拓五十年記念碑は、昭和三十四年に完成。裏面には、入植時に同行した山梨県職員本間則忠氏の作。
【移植えし 元は富士ヶ嶺
甲斐の花 新たに開く山梨の里】の歌が刻まれている。
この移住計画の県知事命に協力したのが広里村花咲の星野愛である。
愛は、明治十二年一月二十七日、父治左エ門、母リン（井上武右衛門妹）の長男として廣里村花咲第百九十八番戸（現大月市大月町花咲七十一番地）に出生した。屋号は日野屋といい累代裕福な地主の農家であった。少年期は明治六年学制実施により、花咲校が設立され、明治二十年四月廣里尋常小学校の本校が花咲に置かれ此処で学び、東京の郁文館中学に進学した。明治三十六年、当時「花咲小町」と詠われた、同村二〇一番豆井上市朗妹あさと結婚した。しかし子宝に恵まれず義兄の娘を養女にする。愛は読書好きな文学青年で、後の大正元モクラシーの担い手となつた「白樺派」のお歴々と同様な地まで歩いた。

二十一トピア」などであつた
この大水害でも、愛の家は
宿中に位置していたので、家
屋流失などの被災は免れ、一
部、笛子川沿いの田畠、山林
の被害はあつたが移住しなく
てはならない状況ではなか
たが、周辺の知人、小作人な
どの被災民の窮状に痛く同情
し、被災民救済のため、親朋
などの反対を押し切つて、傭
知事の要請に応え、北海道による
新天地を開き、大農場による
「ユートピア」の実現を夢見
て、花咲の被災民九十七世帯
のリーダーとして入植地の村

長となつた。愛は入植後、開拓村の将来は次世代の人材育成が急務と考え、私財を投じて、弁辺村下山梨地区に小学校を建て、自らが教師となって、移民子弟の教育に当たつた。

このため、妻あさは毎年生地の花咲に帰つては、自分の土地を切り売りして、其の金を開拓や学校の経費につき込んだ。

「入植した所は、いい土地でも三年間開拓しなければ畠とならなかつた。歯が黄色くなるほどジャガイモを食べた。」と三歳から下山梨で生活した愛の養女の活さんが話す。

やせた土地、収入減、寒さに耐え切れず、大正初めから離村をする人たちが出始め、愛一家も十九年間開拓地で頑張つたが、のち東京に引き上げた。

ユートピア構想に失敗した愛は、花咲に残つた土地を養子に預け、自らは東京神田で絹問屋をしている義弟の井上道太郎商店に身を寄せ、昭和十一年他界した。

愛は、多くの人たちを引率して渡道しながら自分は敗退した責任を感じ、再び故郷の土を踏むことなく永眠した。

太平洋戦争後、次第に住

民も少なくなつて、現在は俱知安の「山梨」豊浦町の「山梨」など、地名だけが残つて
いる。】

参考文献

北海道新聞、山梨日々新聞
(北海道の国体スキー会
場地一帯多くの県人が
入植)

てはならない状況ではなかつたが、周辺の知人、小作人などの被災民の窮状に痛く同情しつゝ、被災民救済のため、親戚などの反対を押し切つて、眞

資料提供
執筆者
協力者

山井親族
口上